

“Do you Love Me?”:
James Baldwin, *Another Country* における肉体と解釈

杉浦 牧

序

James Baldwin の *Another Country* (1962) が同時代的に発揮したスキャンダラスな影響力¹の源には、この小説が持つ過剰なまでの「饒舌さ」を見出すことができる、と言えるだろう。というのもこの小説はその内側において、人種、性、そして「愛」といった登場人物たちの関係性や心理を支配している諸々の問題についてあまりにも多くを語ってしまっているのであり、我々はそうした問題が提起されているのだと受け取らずにはいられないからだ。したがって、*Another Country* について書かれた批評の多くは、切り口こそ違えどその中心にある社会的ならびに時代的問題、特に人種とジェンダー／セクシュアリティ（あるいは同性愛）の扱われ方について取り組むものとなる。²

しかしながら、「饒舌」とは言語化の「不足」、あるいは「不可能」の裏返しであると言うこともできる。それは語りえないものをあえて語ろうともがく、一つの身振りでもあるのだ。そうした側面を反映するかのごとく、この小説が内在的に提示する問題系について論じようとするとき、そこには何か歪みのようなものが見出されることになる。小説のクライマックスにおいてヴィヴァルドとエリックとのセックスがもたらすように見える「救い」としての“revelation” (387)、あるいは小説において繰り返し提示され問い直される“love”に対する批評家の複雑な態度などは、その歪みの証左となる。例えば Christopher Freeburg は“acts of love”としての性行為が、「個人にとって自身を変革するような出来事であり、それは個人の道徳的選択や心情を形作る要因を曝す」(188)と述べており、“love”を個人間の人種的／性的差異に対峙することを可能にさせるものとして肯定的に受け止めている。その一方で、そのような理想主義的な読みを、安直で欺瞞的なものとして退ける向きもある。Kevin Ohi は、性交において訪れる“revelation”の本質が空虚なものであることを鋭く指摘している。彼はエリックとルロワとの関係において表れる“the meaning of revelation is that what is revealed is true, and must be borne” (Baldwin 206) という一節を取り上げ、そこに“tautology of revelation” (Ohi 274) を見て取っている。彼はさらに、こうした“revelation”の自己言及性が、それぞれの登場人物が抱える「謎」や不在の中心としてのルーファスのトラウマティックな不透明さ、その泥沼にはまってしまうような解決のない苦しみを構築するのに寄与しているのだと述べる。Matt Brim も同じく厳しい立場に立つ。彼は人

種と性との縛れを丹念に分析してゆく中でそこに異性愛主義的態度を見出し、この小説においてはゲイの男性という存在が人種間の断絶を架橋するための装置として搾取されているという欺瞞を指摘している。

人種や性といった社会的問題に焦点を定めた分析が、小説の内的構造にある種の分裂を見出してしまわざるをえないのだとすれば、この小説には社会構造やイデオロギーとは別の形で人物たちの行動を駆動する何かがあるのではないかと疑ってみることは自然と言えるのではないだろうか。ここではそれを、ともすれば社会による構造化の対象としてのみ捉えられがちな、人間の肉体そのものへと求めたい。すなわち、肉体は社会的に意味付けられながら、そうした規定から逸脱した独自の仕方においてもまた駆動しているのではないかと、という問題意識から出発するのである。³ 本稿では、そうした肉体性が最も直接的に表れ出る瞬間としての性行為の場面を中心に分析しながら、*Another Country* において肉体というものがどのように構造化されているか、あるいはどのようにそこから逸脱するのか、という問題を考察することを目指す。第一節では、小説の最大の問題である「人種」という枠組みにおいて肉体が意味付けられるさまを記述し、本論の前提を確認する。第二節では性行為の場面を中心に分析し、意味付け以前の生の肉体というもののあり方を精神分析的枠組みを参照しつつ輪郭付けた上で、肉体の不可知性に対する解釈として社会構造および“love”の概念を捉え直す。第三節ではそれまでの分析から得られた肉体と解釈との関係のモデルを踏まえて人種／性問題を再考し、特に白人の肉体性、ルーファスの死といった前節までの分析から浮かび上がる諸問題について考察する。

1. 肉体と構造化

Another Country という物語を縁取る最も重要な枠組みは「人種」である。ルーファスやアイダといった黒人の登場人物の肉体は、人種的に構造化されたものとして小説に現れる。彼らは、自分が黒人であることを常に思い出させられ続け、それは彼らのあらゆる行為と分かちがたく結びついている。その最も顕著な例はルーファスとレオナの関係に見いだされる。レオナと初めてセックスをする場面において彼は自分の衝動を次のように受け止める。

He wanted her to remember him the longest day she lived. And, shortly, nothing could have stopped him, not the white God himself nor *a lynch mob arriving on wings*. (22、斜体引用者)

ルーファスがレオナとセックスを行うとき、彼の意識には“lynch mob”のイメージが呼び起こされる。それは黒人男性による白人女性の「レイプ」となってしまうのである。そして彼らの行為が「まるで古典的なファンタジーを演じているかのよう」

(Rosenblatt 91)「レイプ」として抽象化されるとき、それは自動的にある種のイデオロギー性を帯びる。というのも白人女性を強姦する性的に危険な存在としての黒人男性、というアメリカ社会における「ファンタジー」は、小説が出版された1962年においてもなおアクチュアルなものであり、人々の認識の枠組みに深く影響していたからである。⁴ 自分の言動がすべからず「黒人」の振る舞いや言説に絡めとられてしまわざるを得ないという認識は、性行為が本来「愛の行為」であるはずだという確信のためにいっそうルーファスを追い詰めることとなる。

アイダの肉体もまたルーファスと同じように、黒人の肉体が背負わされた重みから自由ではない。頭を高く上げた彼女の姿勢が、洗濯された白人の衣服を入れた甕を頭に乘せて運ぶ母親の姿と重ね合わされる場面は印象的である(143)。彼女の姿を捉える三人称のナラティブまでもが、ほとんど不自然なまでに唐突に、洗濯女というステレオタイプ的な黒人女性のイメージを呼び出す。ここには、人種をめぐって社会に浸透した言説が小説の構造としての語りそれ自体にも影響を及ぼすさまを見ることができる。⁵

ルーファスやアイダは、自らの肉体が「黒人」の肉体として絶えず意味づけられ、構造化されてしまう次元に生きているのであり、そうした次元から逃れることはできないことを知ってしまっている。それゆえに彼らは、むしろ積極的に黒人を代表し、白人に敵意を向けることで抵抗する。ルーファスは、地主やエレベーターボーイと、彼らが「白人であるがゆえに」戦わねばならないし(68)、アイダのヴィヴァルドに対する“you people”(413)という呼び方には、自分が所属し代表している黒人という共同体とそれ以外の白人たちとを明確に分ち、白人を断罪する意思が感じられる。

これはレオナやヴィヴァルドやキャスといった白人たちの意識には上ってくるのではない問題である。人種関係において白人とは無標の存在であり、白人であるということが意識されるのは「黒人ではない」ことが意識される場合においてのみであるからだ。「白人である」ということそのものが問題であるというような事態はふつう起こらないのであり、「問題化されない」という意味において、白人にとって「人種」というものはそもそも存在しないに等しいのである。そうした白人の一人であったヴィヴァルドはしかし、黒人を代表するアイダの言葉によって「白人」として有標化され、糾弾される立場へと引きずり出されることになる。

“What I’ve never understood,” he said, finally, “is that you always accuse me of making a thing about your color, of penalizing you. But you do the same thing. *You always make me feel white.* Don’t you think that hurts me? You lock me out. And all I want is for you to be a part of me, for me to be a part of you. I *wouldn’t give* a damn if you were striped like a zebra.” (414、斜体引用者)

ヴィヴァルドの訴えは、おめでたい論理としてアイダに一笑に付されてしまう。この発

言は彼の認識におけるずれを、手短に我々に伝えてくれる。彼は自分が「気にし」さえしなければ、人種の差は乗り越えられると思っている。しかし「気にする」かどうかということ、つまり有標に「なる」かどうかという選択肢こそが、無標たる白人の特権に他ならない。こうした傲慢さが、Courtny Thorsson がルーファスとヴィヴァルドとの関係の中に「人種的な抑圧というものを無視」してしまうものとして見出したような、「自分の問題をルーファスの問題になぞらえる」というヴィヴァルドの態度へもつながっていることは明らかだ (618)。キャスが、アイダとの溝が到底埋まりそうにないことへ怒りをぶつける態度にも同じものが見出される。

It happened to all of us! Why was my husband ashamed to speak Polish all the years that he was growing up?—and look at him now, he doesn't know who he is. Maybe we're worse than you. (352)

キャスがポーランド系移民というリチャードの境遇を引き合いに出しつつ懸命に説く論理とは、簡潔に言えばこうだ。皆似たり寄つたりの何かを抱えて苦しんでいる。「自分が何者であるか」という問題に思い悩んでいるのは黒人ばかりではないのだと。“suffering doesn't have a color” (417) とヴィヴァルドも言う。しかしこうした実に「白人」的な論理は、両者の溝を埋めるところか、その致命的なすれ違いを暴露する。キャスにとって（あるいは無標たる白人にとって）人種とは、エスニシティや階級といった広い意味での社会的ステータスの一形態に過ぎないのである。その論理は「肌の色」という、肉体に、意識に刻印された経験⁶ から重みを取り払い、それを均質化されたカテゴリーの枠内に押しやってしまう。誰もが苦しんでいると反駁することは、問題になっている苦しみを癒すどころか、その苦しみに枠組みを与え、飼いならそうとする態度のあらわれに他ならないのである。その意味でキャスとアイダの懸隔も埋まることがない。

ここまで見てきたように、ヴィヴァルドやキャス達とは異なり、ルーファスやアイダの肉体は常に人種化されていて、いちいちの行為がある種の社会性、政治性を帯びたものとして意味付けられてしまう。そうすると、ルーファスやアイダの肉体はあたかも人種や歴史といった社会構造、あるいはそれを支えるイデオロギーの受け皿のように感じられてきさえするかもしれない。しかし、では一体なぜ肉体はイデオロギーを背負わせられなければならないのだろうか。そこには肉体をイデオロギーの発露の場として解釈するよう強いている何かがあるのではないだろうか。次節ではその何かを、肉体そのものの生々しさ、という点に求めてゆく。そこでは、理解不可能な肉体というものを抽象的に扱えるように事後的な「解釈」が要請される、というメカニズムが見出されることになるだろう。

2. 不随意な肉体と解釈：現実界と“love”

理解不可能な肉体、という問題を考える上でまず注目したいのは、この小説では登場人物が頻繁に涙を流すという点である。涙を流すという行為は基本的に感情の昂ぶりと結びついたものである。したがって涙は泣いている人間の感情と相関関係にあるものの、多くの場合不意のものであり、泣いている人間は自由に泣き始めたり泣き止んだりできるわけではない。ルーファスが泣くいくつかの場面をほんの一例として見てみると、多くの場合主語はルーファスではなく“tears”という形をとっており（5, 43, 69）、（動詞は様々な形であれ）涙がルーファスの意図とは関係なく出たり湧き出したりしている。同時に、外側から見れば涙は一種の感情のマーカーであるから、詳しい事情を知らずともその人物になんらかの強い感情が押し寄せているのだということは分かるようになっていく。ゆえに、外面において涙が観察されると、それを見ている人間は涙が一体こういった感情から出たものなのかを解釈したくなる。しかしここで言っておきたいのは、そうした解釈が、泣いている本人にとってほとんど重要なものではないということだ。泣いている人間は自分がなぜ泣いているかなど考えない。ただ泣いているだけである。（言語化できるにせよできないにせよ）強い衝動と、身体への反応としての涙があるだけなのだ。その感情を解釈し、理解するのは後になってからである。ここで一例としてルーファスが死の直前に涙を流す場面を取り出してみよう。

He began to cry. Something in Rufus which could not break shook him like a rag doll and splashed salt water all over his face and filled his throat and his nostrils with anguish. He knew the pain would never stop. He could never go down into the city again. He dropped his head as though someone had struck him and looked down at the water. It was cold and the water would be cold. (87)

ここでは“something”という言葉遣いがなされていることに注意すべきだ。彼が厳密な意味で動作の主体たりえていないことは、“something”という主語の他にも、“the pain would never stop”や“as if someone had struck him”といった表現にも表れている。ルーファスの身体をコントロールしているものは基本的に名指されえないものであり、「何か」と呼ぶほかない何かである。そうした「何か」は他の場面においても“His body was controlled by laws he did not understand”（54）などと言い換えられつつ繰り返し表れる。

さて、なぜここで涙というものの意味について取り上げたかといえば、この小説における肉体を考える上での重要な示唆がそこにあるように思われるからだ。それは、この小説においては解釈が問題とならないようなただの肉体的な行為というものが存在して

いるのではないか、という問題意識を導くのである。逆に言えば、生々しい肉体というものに直面するとき、人はそれを何かしら意味付けたくなくなるのではないか。

ここで肉体の「生々しさ」というふうに呼び表したものを考えるにあたって参照したいのは、ラカンが「現実界」と呼ぶ概念であり、さらには「現実界の中心にある空虚の实在」（『精神分析』183）としての「〈もの〉」の概念だ。「現実界」とは象徴界の到達不可能な外部に措定され、「媒介なしに接近することはできない」ものである（『精神分析』27）。その中心にある〈もの〉とは、「現実界に属しており原拠的な現実界であるにもかかわらず、シニフィアンをいうなれば受苦するもの」であり、我々は「〈もの〉を把握するためには、〈もの〉を取り囲み迂回せざるをえない」（『精神分析』177）。つまり、〈もの〉とは、基本的に表象不可能な経験、むしろ表象における「欠如」として現れる経験だと言える。スラヴォイ・ジジエクはラカンの言う現実界が、性的関係において顕現することを指摘する。

性は、われわれが他の人間に最大限に接近し、彼あるいは彼女に自分を全面的に晒す領域なので、ラカンにとって性的享樂は現実界的である。その息もつけないほどの強烈さにはどこか外傷的なところがあるし、われわれがそれをまったく理解できないという意味では、あるはずのないものである。だからこそ、性関係が機能するためには、なんらかの幻想を通過させなければならない。（90）

ここで我々は、ラカンが性的関係において露呈することを見て取った外傷的な現実界なるものを、肉体の「生々しさ」へと接続してみたい。そうすることで、肉体のトラウマティックさを捨象するために持ち出される「幻想」の一つの形態として、これまで述べてきた肉体の構造化を位置づけることが可能になるのである。

肉体そのものが持つ外傷的な側面を考えるため、分析の焦点は小説中で印象的に描かれる性行為の場面へと合わせられることになる。ラカンは現実界に触れることを「享樂(jouissance)」と呼んでいるが、本節で分析しようとしている性行為の場面は生の肉体というものが露出し人間がそれに直面するという意味において、どれも「享樂」であると言える。まずはその「享樂」という概念の輪郭を明らかにしておきたい。ラカンは欲望と享樂とを区別し、「享樂は〈物〉の側にある」と言う（『エクリ』383）。さらにこれを受けた佐々木中は以下のようにこの概念を展開する。

これは要するに大他者とシニフィアン連鎖の関係だけには回収されない、現実界に属する「もの」そのものの次元に深く参与するのが享樂であってその言葉にもイメージにもならない何かに向かって「欲望し続けること、欲望するのをやめないこと」というよりはむしろ「欲望の緊張を持ち続けることをやめられないこと」が享樂であると言ったほうが妥当だろう。（151）

佐々木がここで強調する「享楽」の本質とは、現実界に参与する経験の外傷性にもかかわらずそこに「欲望の緊張を持続けること」の、「やめられなさ」である。ではそうした「享楽」のメカニズムは、この小説に現れる性行為に及ぶ肉体という場において、実際にどのような現れ方をし、どのように「やめられない」のだろうか。ここから小説に登場する性行為の場面を一つ一つ見てゆくことになる。というのも、性と人種をまたいだ様々な組み合わせによって行われる性行為の場面は、それぞれが肉体との関係において固有の問題を浮かび上がらせるからである。

小説にはいくつかの性行為の場面があるが、最初に登場するのはルーファスとレオナの組み合わせである。この場面を追ってゆくと、肉体を前にした描写の言葉が、ある特徴的なプロセスを経てゆくさまをうかがうことができる。二人のセックスは、以下のよう

“Oh God,” she murmured, and began to cry. At the same time, she ceased struggling. Her hands came up and touched his face *as though she were blind*. Then she *put her arms around* his neck and *clung* to him, still shaking. His lips and his teeth *touched* her ears and her neck and he told her. “Honey, you ain’t got nothing to cry about yet.” (21、斜体引用者)

ここで我々は、三人称の語り手がとる特殊なふるまいに目を引かれることになる。斜体部などに注目してゆくと、描写が「触覚的」とでも呼ぶべき次元に入ってゆくのが分かるだろう。二人が部屋を出て「暗闇」、*“the darkest part of the balcony”* (20) へと足を踏み入れていることや、抵抗することをやめたレオナが「盲目であるかのように」彼の顔を触りはじめることが端的に示すように、ここでは「視覚」が特権的な地位を奪われているのだ。描写はきわめて肉体的な面、肉体同士の運動や感覚を捉えることに費やされていく。

その結果として、興味深いことに、ここには「色」の消失がもたらされる。厳密に言えば人種のマーカーとしての「白／黒」の消失が。この場面でレオナの肉体に与えられた色の説明は、*“her breasts, standing like mounds of yellow cream”* や *“the tough, brown, tasty nipples”* (21) という描写における「黄色」「茶色」である。Barry Gross も指摘するように、ルーファスは「愛の瞬間においてのみ、黒／白の二項対立から逃れる」ことができているのである (112)。⁷ そして、*“another part of him could not stop the crazy thing which had begun”* (21) とあるように、もはや肉体はルーファスにとって制御不能なものになってゆき、*“burned”*、*“accelerating tremor”*、*“so tight”*、*“so sharply, and stiffened so”* (21) などと、しきりに「激しさ」が強調されるようになる。注目したいのは、さらに場面が展開したところで、二人のセックスが突然海と船のメタファーによって語られはじめることだ。

And she carried him, as the sea will carry the boat: with a slow, rocking and rising and motion, barely suggestive of the violence of the deep. They murmured and sobbed on this journey, he softly, insistently cursed. Each labored to reach a harbor: there could be no rest until this motion became unbearably accelerated by the power that was rising in them both. (21)

ここで唐突に出現する「海」としての女性、その大洋を航行する「船」としての男性という図式はいささか通俗的で、それまでの身に迫る身体描写からすると氣勢をそがれたような感すらある。しかし、なぜわざわざこのようなありきたりの図式が持ち込まれる必要があったのかという問題にこそ注目すべきである。そこで次のように考えてみることは可能ではないだろうか。制御不能となってしまった二人の肉体が突き進んでゆく運動の過剰さが、リアリスティックに描写することの可能な領域を逸脱してしまったのではないかと。ここで起こっていることがあまりにも過剰で、過激で、外傷的なために、語り手ですらそれを一つのメタファーによって置換するほかなかったのだ。享樂は、このような描写の「失敗」にこそ現れる。そして、運動が絶頂に向けてさらに勢いを増すとき、図式はさらに別のものに置換され、それまでなりを潜めていた「白／黒」が回帰するのである。ここに“white God”や“lynch mob”が現れることは前節でも触れたとおりである。レオナは“alabaster” (21) になぞらえられ、ルーファスに“milk-white bitch” (22) と罵られる。ルーファスは絶頂の瞬間、その先の可能性として“black-white babies” (22) を見据えている。ここに至って、二人の行為は「レイプ」として、さらには“miscegenation”としてスキャンダラスな社会的意味を負わされ、事後的に意味付け直されるのである。剥き出しになった肉体同士の運動が、日常言語の埒外へと逸脱するほどに過熱し、急ごしらえのありきたりな図式化をものはねつけてしまったとき、言わば切り札のようにして人種という枠組みが持ち出され、二人の行為が人種的行為として表象可能であったことが「思い出さ」れるのだ。

次に登場するのはアイダとヴィヴァルドのセックスである。行われる二回のセックスのうち初めの一回において、アイダはヴィヴァルドを「潮へと引きずり込む」(172) 一方で、自身の身体は抑制し、衝動に飲み込まれることなく行為を済ませているように思われる。しかし二回目において、両者の立場は逆転する。アイダは“as though she were drowning” (177) と制御不能の状態に陥っており、一方ヴィヴァルドは“determined to bring her over the edge and into possession” (177) と、動物的な周到さでもってアイダとの行為に及ぶ。描写は肉体の動きに費やされてゆき、ここでもまた、メタファーが出現することになる。ここに現れるのは“he felt that he was traveling up a savage, jungle river, looking for the source which remained hidden just beyond the black, dangerous, dripping foliage” (177) という、あきれるほどに陳腐な、「闇の奥」としての黒人女性の肉体とそこに分け入ってゆく白人男性ヴィヴァルドという図式だ。ボールドウィンの政治的立場を考えれば、にわかに信じ

がたいとすら思われるステレオタイプの記述である。しかし我々は、描写がなぜこれほどまでに安易なものに堕してしまうのかについて、前例を知っているのではなかったか。ルーファスとレオナのセックスにおいて唐突に現れる海／船のメタファーがそれである。ここでもまた、肉体の過激さがメタファーによって置換されているのだ。

ここまで述べてきた異人種間の二組による性行為の場面からはともに、肉体の過激さをメタファーや人種的枠組みによって置換する、という構図を取り出すことができた。一方、これから述べる白人同士の二組の性行為場面では“love”という概念をめぐって前に述べた二組とは質の異なる傾向が見出されるように思われる。次に見ていきたいのは、白人の異性同士であるエリックとキャスのセックスである。この場面には「光」というものの存在をめぐって注目すべき特徴がみられるのだが、この特徴の詳述については次節に譲り、ここではさしあたり二人の間で“love”についての思索がなされていることを指摘しておきたい。セックスの後でキャスはエリックに“was it love or not?”と問い、それが「セックスだ」という答えでは何も明らかにならないとまとめる (288)。結局のところ対話を重ねる二人のどちらも“love”については何も分からないものの、場面には喜びや笑いが満ち、和やかなトーンが演出されている (291)。

ここにほんやりとした形で現れた“love”は、最後にあらわれる白人男性同士であるエリックとヴィヴァルドのセックスにおいて“revelation”としての決定的な重要性を与えられることになる。この場面での描写はヴィヴァルドの内面に深く立ち入っている。“How strange it felt, this violent muscle, stretching and throbbing, so like his own, but belonging to another!” (384) という彼の感覚は印象的だ。ここでもヴィヴァルドの肉体はやはり他者性を帯び制御不能のものとなっている。そしてヴィヴァルドは、これまでに感じたことのない自らの感覚を前に戸惑っている。

He associated the act with the humiliation and the debasement of one male by another, the inferior male of less importance than the crumpled, cast off handkerchief; *but he did not feel this way toward Eric; and therefore he did not know what he felt.* (384、斜体引用者)

彼は自分の行っていることが軽蔑されるべき行為としての同性同士の性行為であり、それを行う人間は恥ずべき人間である、という枠組みを与えようとするのだが、上手くない。エリックに対しては「そのようには感じない」からである。さらに彼は、次のような戸惑いをも漏らす。

He knew that he was condemned to women. What was it like to be a man, condemned to men? He could not imagine it and he felt a quick revulsion, quickly banished. But at the very same moment his excitement increased: he felt that he could do whatever he liked. (385)

彼は同性間の性行為に対する拒絶反応から一歩進み、女性とのセックスと、今行われているセックスとが何か違う “virtue” (385) のためになされているのだとぼんやり自覚する。戸惑い、拒絶するヴィヴァルドの肉体には間違いなく “excitement” があり、そこに可能性を感じてしまっているのである。そして、この行為を最終的に理解可能なものへと昇華させるのが “love” の概念である。行為が終わった後でもなおその経験に戸惑うヴィヴァルドの意識に「救い」をもたらすのは、エリックとの間に “love” がある、という認識なのだ——“He loved Eric: it was a great revelation. But it was yet more strange and made for unprecedented steadiness and freedom, that he Eric loved him” (387)。結果として彼らの性行為はヴィヴァルドに大きな幸福感を与えている。

さて、性行為の場面において確認された、意味付けられていない肉体というものは、その肉体の持ち主やそれに触れるものにとって不可知な他者性を帯びたものである。エリックとセックスをするヴィヴァルドにとって男性の肉体は “the most impenetrable of mysteries” (385) へと変貌するし、ヴィヴァルドとアイダは互いにとって、“mystery” (172, 176) になっていた。同時にそのような不可知の肉体とは恐ろしいものであり、常に不安や恐れを伴う。実際、肉体に対する感覚として “frightened” (22)、“terror” (176)、“afraid” (288)、“ill at ease” (384) といった恐れや不安を示す言葉が全ての性行為の場面に登場している。その上でエリックと行為に及ぼうとするときのキャスの心情を引いてみたい。

She did not quite know what was happening now, or where it would lead, and she was afraid; but she did not want it to stop. (288)

彼女は何が起きているのか分からず恐れを抱きながら、しかしやめることはできない。確認しておいたように、この「やめることのできなさ」こそラカンの言う享楽に他ならない。そして涙について述べたことと同じことがここにも言える。肉体は、固有の論理で反応しているが、それをコントロールすることはできないのだ。

補足しておけば、涙に限らず、性行為の場面において特に頻繁に描写される多様な身体現象も、肉体そのものの他者性を感じさせるのに寄与している。例えば「汗」だ。⁸ 運動や心的な反応の結果として発汗することは、液体の放出という点では涙にも共通する感覚であり、制御できないシステムを感じさせるものとして代表的だと言えるだろう。さらに、「震え」や、うめいたり、口をぶつぶつ言わせたりするといった現象も散見される。⁹ これらの現象にしても、やはり肉体から勝手に「発せられてしまう」もののであり、レオナのうめきがルーファスにとって “words he couldn’t understand” (22) であったように、そこには我々の関知しえない他者的なシステムと反応とが剥き出しになっているのだ。できることは後になってからそれを解釈し、意味付けることだけであ

る。

その解釈の道具としてこそ、“love”の概念が持ち出されることになるのではないだろうか。小説の冒頭から“Do you love me?”(8)と咆哮するサキソフォンが印象付けるように、この小説の大きな主題として“love”とは何か、それが人種や性別を超えて人間と人間との間に成立するかという問題があった。そして主要な登場人物の誰もが“love”を求め、悩んでいた。しかしその実、どのような関係性ならば“love”が成立するかということに関して、小説ははっきりとした答えを用意しているわけではない。それは単なる友情関係ではなく、肉体関係でもないし、婚姻関係でもないし、子とともに育てるという関係でもない。翻って考えれば、この小説に現れる“love”という概念は主体が「私は～を愛している」という解釈を行い、宣言することによって成立してしまう関係性だと言えるのではないだろうか。

ヴィヴァルドはアイダとのセックスの最中において、“affection, tenderness, desire”(178)を覚えている。ここではセックスという行為自体が彼にある種の感情を引き起こしているのだが、注意したいのはここで彼が感じるのはあくまで“affection”であって“love”ではないということだ。ルーファスがレオナとセックスをしようとするときに感じている“tenderness”(21)もこうした感情として数えられる。つまり、現在進行的な肉体同士の行為はその時点ではまだ“love”として抽象化されていないのだ。ヴィヴァルドがエリックを「愛し」ているという考えが“revelation”として、断言のように彼のもとに訪れることは、“love”の認識がある種の「飛躍」を伴うことを物語っている。まず肉体同士の接触があり、そこにいわく言い難いながしかの感情や交感が生起したとき、遡及的にその接触が“love”によるものであるかどうかを解釈することによって、“love”は成立するのである。

ヴィヴァルドはルーファスが死ぬ前、彼を抱いてやれなかったことを悔やむ。

I wondered, I guess I still wonder, what would have happened if I'd taken him in my arms, if I'd held him, if I hadn't been—afraid. I was afraid that he wouldn't understand that it was—only love. (342)

ルーファスは最後まで自分の行為を黒人／白人の枠組みでしか解釈できなかった。しかし、もし自分が「ただ愛だけによって」(“only love”)意味付けされた肉体の行為というものを教えることができたなら、ルーファスの自己認識を自殺に至るほどの泥沼から救い出すことができたかもしれないと彼は考えているのである。彼は“I had the weirdest feeling that he wanted me to take him in my arms. And not for sex, though maybe sex would have happened”(342)とも言う。彼は“love”という概念があればルーファスとの間にセックスが発生したとしてもそれを肯定的に受け止めることができると考えている。ここでは“love”が人種や性を越えて成立する可能性を秘めたものとして提示されているのである。

しかし重要なのは、こうした越境可能性が解釈の道具としての“love”の性質によって演出されたものだという事だ。ヴィヴァルドとアイダとの最後の対話を挙げて“the acceptance of another person’s shortcomings, *even without understanding, in a way that shows compassion and demonstrates love*” (187、斜体引用者) と呼ぶ Christopher Freeburg のように“love”の前言語的な越境可能性を「まじめに」受け取ることは可能だが、小説の全編を通してあらゆる人物の口にするいささかルーズなキーフレーズとしての“love”はむしろ、肉体の生々しさを前にしたときの逃避的な解釈の拠り所としてきわめて有効に機能していると考えられるべきなのである。

性行為場面の分析を経た今、人種に代表される社会的構造化と“love”とはともに享楽する肉体を前にした「解釈」の形態として捉え返されることとなる。とはいえ、それらの「解釈」がその方向性や重みにおいて全く異なったものであることは言うまでもない。ではそうした解釈の諸形態は、それぞれの事情を抱えた登場人物たちの肉体においてどのように現れ、せめぎ合うのだろうか。次節ではそうした問題に触れたい。

3. 「白」の解釈、「黒」の享楽

前節まで、性行為の場面を中心にして外傷的な肉体とその意味付けのプロセスとを分析し、肉体と解釈との関係における一連のメカニズムを取り出してきた。しかし、これらの構図から小説を一望するとき、未だ解決されていない問題があることに気付く。“love”を知った後でもやはりヴィヴァルドとアイダの立場が平行線上なのはなぜだろうか。一方でなぜ白人同士の性行為は小説的な「救い」をもたらしているように見えるのか。性的関係において社会的意味付け以前の生の肉体が露出されるとして、そもそも白人の肉体はそうした意味付けが希薄なのではなかったか。ここで我々は再び、これまでの分析で得たものを手に社会的問題へと戻っていかねばならない。まず初めに、第一節では「黒人の肉体」と違って人種的構造化をあまり受けていない存在として説明されるにとどまっていた「白人の肉体」において、どのような事態が起こっているのかを考えることから始めたい。

第一節で、白人の肉体においては人種という枠組みによる意味付けの影響が薄いということを確認した。社会的枠組みによって「黒」を刻印されてしまった黒人の場合と対照的に「白人であること」が肉体を意味づけることに繋がらないとき、白人は自身の肉体を戦略的に何らかの幻想の中に取り込む必要が生じる。これは「自分とは何者なのか知りたい」というアイデンティティをめぐる近代的な欲求と地続きになっている。キャスガリチャードおよびエリックとの関係において、“self”という問題に拘っていることは興味深い。リチャードとの不和は彼女に満足のゆく安定した位置を与えてくれない。それは漠然とした不満としてキャスに蓄積し、やがてエリックへの思慕につながってゆく。そしてエリックとの性行為において、彼女は「自分」に関する何かを見出すことになる。

She felt herself carried back to an unremembered, unimaginable time and state when she had not been Cass, as she was now, but the plain, mild, arrogant, waiting *Clarissa*, when she had not been weary, when love was on the road but not yet at the gates. (291)

セックスにおいて露呈したキャスの無秩序な肉体は、彼女をキャスになる前の“*Clarissa*”としての気分させる。そこに現れるものは、「今ここの私」とは違う何かの姿である。それは“plain”な性質を帯びた何かとして表象される。そしてセックスが終わった後、彼女はより直接的な言葉でその思いを表現する。

She really felt that a weight had rolled away, and that she was herself again, in her own skin, for the first time in a long time. (292)

彼女が見出した何かとは、「ほんとうの私自身」、「herself」に他ならない。“again”という言葉が印象的だ。前の引用部からも明らかだが、彼女にとって「私自身」は、過去へと向かう時間軸の先に見いだされる。エリックは「時間の経過」についてキャスに問い、キャスは“growing just means learning more and more about anguish” (405) と言う。つまり、性行為において剥き出しになる肉体とはキャスにとって、成長するにつれて失われてしまった無垢な「私自身」として「発見」されるものなのだ。

この「発見」へのプロセスを駆動するために重要な役割を果たしているのが「光」である。前節で省略しておいたキャスとエリックとの場面に特徴的な点とは、“He glowed in the light which came from the lamp above her head. She could not bear to turn it off” (291) というように明るいところでセックスが行われていることだ。明かりが消えるのは行為が終わった後になってからである。そして行為に及んでいるとき、“looked up at her”、“gazed on each other”、“looked on her body”、“watched him” (291) と、彼らが実によくお互いを「見て」いることも指摘することが出来る。ここで“love”の「謎」を解き明かしているのは“so merciless a light” (291) である。前節で指摘したようにルーファスとレオナの肉体という場において「暗闇」が、そして「触覚」が、人種のマーカーとしての「色」の消失を引き起こしていたのに対して、「色」がない二人の白人の肉体は、“love”を平明な「光」のもとに文字通り「見」出すのであり、そこにはロマンティックに互いをいたわり合う世界が開けているのだ。

こうして、人種というイデオロギー的意味付けが希薄な白人にとっての性行為は、協働的な自己／相互探求の営みへと読み替えられることとなる。小説において白人と黒人の組み合わせによるセックス（ルーファス／レオナ、アイダ／ヴィヴァルド）が両者の関係性をほとんど更新することがないのに比べて白人同士のセックス（エリック／キャ

ス、エリック／ヴィヴァルド）が何らかの「救い」をもたらすように見えるのはそのためである。もちろんここには性という問題も絡まってくる。エリックとヴィヴァルドのセックスについて Matt Brim は、そもそもここに成立する “love” 自体が不均等なものであり、エリックの “gay love” はヴィヴァルドによって報いられてはいないと厳しく述べている（108）。とは言え小説のトーンを問題にするならば、ここでは一応 “love” によるヘテロセクシュアル／ホモセクシュアルの越境が成し遂げられ、二人が新たな自己認識に至ったように演出されていると言うことはできるだろう。

しかし、注意しておきたいのはこれがあくまで白人同士の性行為において起こっているということだ。この小説において “love” によるセクシュアリティの越境は、人種の越境を担保するわけではないのである。その意味で、ヴィヴァルドがエリックとのセックスにおいてルーファスとのあり得たかもしれないセックスを呼び出してみせることは重要な意味を持つてくる。彼は “love” による白人的な自己探求の幻想に、ルーファスを引き込もうとしている。ルーファスともに、「黒人」「白人」である以前の「本当の自分」を見つけようとしているのである。それはヴィヴァルドなりに真摯な、ルーファスを思う衝動から生じた行為ではあるのだが、可能なのはあくまでヴィヴァルドの幻想の上においてだけである。ここに述べたようなある意味で幸福な論理は、黒人として常に意味づけられてしまうルーファスには許されていないのだ。ルーファスがレオナとのセックスのクライマックスにおいて「白／黒」の図式を思い出すことは第二節で述べたし、アイダはセックスを経ても黒人としての立場を代表して白人を糾弾する姿勢を崩すことはない。なるほど小説の結末部におけるヴィヴァルドとアイダの関係にはある種の “a semblance of stability” (Nelson 29) がもたらされるように見えるとしても、一方で二人の最後の対話を締めくくる、アイダの “I don’t want you to be *understanding*. I don’t want you to be *kind*, okay?” (430) という言葉は、最後まで「相互理解」のような甘えを許していない。彼らの黒人として構造化された肉体は、「本当の私」という安易な上書きを撥ねつけてしまうのである。

こうした文脈において、Ernesto Javier Martínez がこの小説におけるアイデンティティの問題を取り上げ、物語が「自分の人生をよりよく理解するために、自己に対する感覚を危険に曝す（比喩的に自殺する）」ことを全ての人物に強いるような「倫理的命令」によって駆動されている、と論じていることは興味深い（783）。彼は登場人物たちが社会的現実との関連において自己を理解し引き受けるという「故意で、一見取り返しのつかない、自己を脅かすような」行為を “suicidal sensibility” (783) と名付け、その上でこの小説がそうした「比喩的な自殺」に人物たちがむしろ失敗することを前景化するのだと指摘している（791）。これまでの議論を踏まえれば、ここで指摘された「命令」の淵源に肉体の外傷性を読み取ることは難しくないだろう。しかし、アイデンティティをめぐる登場人物のふるまいを「自殺」になぞらえることには疑問を持たざるをえない。肉体を問題にするならば、登場人物たちが傷つきながらも新たな自己認識へと立ち至ったり失敗したりすることと、ルーファスが「実際に」死ぬことの間には、ア

イデンティティという観点からだけではすくいきれない深い断絶があると考えるべきだからである。

最後に我々は肉体の消失、すなわち小説の核であるルーファスの自殺という問題に立ち戻ることになる。Sara Beebe Fryer はルーファスの葬式におけるフォスター牧師によるルーファスの称揚を引きつつ、ボールドウィンにとって自身のアイデンティティをめぐる苦闘したルーファスは、たとえ死に終わるとしても“fully alive”なキャラクターであったと論じている(23)。しかし、そうしたレトリックによる「救い」はむしろ、ルーファスの自殺が持つ本質的な重要性から我々の目を逸らしてしまうだろう。何度も触れてきたように、彼は最後まで自らの肉体や行為を、「黒人」の枠組みでしか解釈できなかったのだ。それ以外の可能性らしきものは、全て封じられていた。彼はレオナとのセックスを重ねても、そこに“love”を感じられなかった。彼の意識は半ば強迫的に、レオナを、“colored folks”好きの“white bitch”というステレオタイプへと押し込める。さらに彼は、自分を殺そうとする白人たちに囲まれ、それと戦わねばならないという破滅的な幻想(67-68)に絡めとられてしまう。彼は外傷的な性的関係を、より外傷的な幻想の中に意味付けるしかないという、袋小路にあったのである。彼の幻想の強迫性は、彼に休む隙を与えない。

ルーファスの人種に対する強迫的な執着を考えると、彼の自殺の背後に「死の欲動」を見てしまいたくなることは偶然ではないだろう。フロイトが、「快感をもたらす可能性のまったくない過去の体験を再び喚起する」(137-38) 反復強迫の分析をきっかけとして、快感原則の彼岸に生命のない無機状態に還帰しようとする保守的な欲動、すなわち「死の欲動」を見出したことは有名だ(162)。フロイトがさらに「超自我」の概念を深化させてゆくなかで、「死の欲動」は自我を極限まで追い詰めるサディスティックな超自我を支配する原理として捉えられるようになってゆく(264)。ルーファスの自縄自縛は、こうした説明にあまりにもよくあてはまってしまう。死が彼の認識を支配する。興味深いのは彼が死について初めて思いめぐらすとき、その意識が性行為において現れた肉体への戸惑いと酷似していることだ。

Then something began to awaken in him, something new; it increased his distance; it increased his pain. They were rushing—to the platform, to the tracks. Something he had not thought of for many years, something he had never ceased to think of, came back to him as he walked behind the crowd. (84-85)

彼ならざる「何か」が彼の中に目覚める。彼の肉体を支配しているものとして第二節でも言及したあの「何か」である。彼はすぐに“The subway platform was a dangerous place”という認識、そしてホームに落ちることの恐怖を思うのだが、それでも彼は生まれた衝動を持って余したまま、目まぐるしいイメージの奔流に身を委ね、電

車に乗り、歩き、最後には橋から身を投げてしまう。だとするならば、ここでルーファスは、自らの逃げ場のない緊張状態を「享楽」している、と言えるのではないだろうか。彼が夢想する、電車に乗った人々がバラバラになって死んでゆく凄惨なイメージの中には、“with joy—for the first time, joy, joy” (85) という言葉さえ入っている。フロイトを引き継いでラカンが輪郭付けた超自我とはまさに「享楽」を禁止しつつ、「享楽せよ」(Jouis) と命令するものであった(『エクリ』334-35)。ここで彼は「欲望の緊張を持続けることをやめられなく」なっているのであり、死との直面において「もの」として現れた肉体に向き合っているのだと言える。

そしてここにも、性行為の場面に現れていたあの「黒」のイメージが回帰することになる。夜の川面を見つめるルーファスが水の「黒さ」と重ね合わされるのだ——“He was black and the water was black” (87)。しかし、ここで現れた「黒」のイメージはレオナとのセックスにおいて見られた“miscegenation”の図式やアイダとヴィヴァルドの場面で言及した「闇の奥」のイメージとはモードが異なっているように思われる。直前の“It was cold and the water would be cold” (87) を受けて引き出され、前後のパラグラフから独立して投げ出すように置かれたこの一文には、「黒」のイメージが常に引きずらざるを得なかった社会的意味が希薄のように見えるのである。直前の部分においてルーファスが橋の上から街を眺めると、「歩いていたときはあれほど暗かった街が燃えている」かのように明るい (87)。ここで彼の“dark”さについての認識は攪乱されている。彼は、もしかすると「黒さ」とは自分の考えていたものとは違うのかもしれない、という可能性に思いをめぐらす。そして「彼は黒かった」という文と「水は黒かった」という文が“and”によって並列された一文において、彼の肉体の「黒さ」は、水の黒さの描写と同じ次元で語られるのだ。ルーファスは、人種の枠組みに依らなくとも、黒いものを黒いと認識することができることを発見するのである。

これまでの論旨に照らせば、享楽する肉体とそこに解釈として回帰する「黒さ」とは対立関係をなしていた。ある種の原的状態としての肉体性が人物のもとに現れたときに、それを象徴化する枠組みとして構築された人種的解釈が与えられていた、と言い換えてもよい。その意味で「黒さ」とは肉体性を封じるものであった。しかし、ルーファスの自殺の場面でこの対立関係は転倒される。死との直面において前景化されたルーファスの肉体はその黒さを解体し、「黒人」としての社会的意味付け以前へと引き戻す。ここでの黒さは、死を享楽する肉体を封じないのだ。その意味で、ルーファスの自殺が単なる厳しい社会的現実への敗北であるとか、人種からの逃避であるなどとは、もはや言えない。ルーファスは死の瞬間において初めて、逃れようと苦闘してきた「黒さ」を、人種の意味付けと「黒さ」とを分離することによって引き受けたのであり、それは彼が死において自分の肉体を「黒い」ままに享楽したことを示すのである。

小説における肉体を分析するという本稿の試みは、これまでこの小説の内在的論理をめぐって批評家たちが見出してきたある種のルーズさ、相互に摩擦を起こしてきた諸「問題」を「解釈」という同一の次元で捉えることを可能にした。その上で、社会的抑

圧を最も厳しい形で内面化していたルーファスの肉体には、死の瞬間、享楽が見出されたのである。享楽する肉体は誰にとっても外傷的で、解釈なしには直面することが出来ないものであるが、この小説はそうした解釈のありようをめぐって、白人と黒人の登場人物たちの間に痛ましいほどの非対称性を見出してしまふ。かたや“love”という解釈によって外傷性を捨象することができた白人キャス、ヴィヴァルド、エリックがアイデンティティを発見するという形で「救われ」る一方で、“love”が上書きすることのできない解釈としての人種構造を付与されてしまった黒人ルーファスが自身の「黒さ」を引き受けた上で真に肉体を享楽するとき、その先には死しか待っていないのだから。

注

¹ 同時代的影響力という点に関して、例えば Leslie Fiedler は、小説が刊行される 2 年前に出版された大著 *Love and Death in the American Novel* を 6 年後に再版するにあたって、黒人問題と同性愛の問題とが「我々の最も深い想像力において神話的に」結びついていることを（「どれほど声高で場違いな形であれ」、という留保付きではあるが）示す例として *Another Country* に言及する注を書き加えている（366）。

² 人種と性に対する時代的意識に直接的に言及した批評としては、Eldridge Cleaver の同性愛や黒人のマスキュリニティをめぐる態度とこの小説とを照らし合わせながら、同時代的な黒人作家の言説と“black nationalism”との関係を分析した Stefanie Dunning などを参照。

³ この小説における「身体」の扱いについて、Brandon Gordon は“sympathy”との関係という側面から言及している。彼はエリックとヴィヴァルドの性行為において最も顕著にみられるような、「自分の身体への侵入」という“passivity”の経験に着目し、そこに他者の苦しみを理解するための鍵を見出している（88）。

⁴ *Another Country* が刊行される 10 年前の 1952 年に出版された Frantz Fanon の *Black Skin, White Masks* などを参照すると、アメリカ社会における黒人男性の性的能力とレイプにまつわる白人の「幻想」はきわめて実際的な問題として言及されており、Fanon はその構造について精神分析的見地から説明を試みている（136-38）。

⁵ 小説における社会的な認識の枠組みに言及する批評として、頻繁になされる警察の描写とそれが象徴的に示す「法」の存在が二人の関係を容易に「レイプ」へと変換してしまいうることを指摘した D. Quentin Miller（53-54）や、この小説におけるニューヨークの都市空間を歴史の蓄積した“space”であると捉え、7 番街という通りが象徴するような街に蓄積する言説がアイダを「黒人女性」として構造化してしまうことを指摘した Amy Reddinger（125）が挙げられる。

⁶ ここで留意しておかなければならないのは、肌の色としては「無標」に近い（つまり白人として「パス」することができる）「黒人」も存在するということである。こうした人々もやはり社会の中で「黒人」として振る舞うことを余儀なくされることを考えると、黒人問題がここで焦点化したような「肉体」の問題として一括りに捉えることのできない広がりを持っていることには注意しておく必要がある。

⁷ Gross は「愛の瞬間」においてルーファスが「色」を見出すことの例として、この箇所の

他にもアイダの回想に現れる “the colors of the shawl, the colors of the sun” (7) やエリックの回想に現れる “the red and the brown” (45) を指摘している。これらがどちらも「回想」の中であることは興味深い。「色」は、既に喪失されてしまったものとしてしかルーファスのもとに回帰しないのである。

⁸ セックスに至る前、アイダに語りかけるヴィヴァルドが彼女の額を触ると、そこは “already beginning to be damp” (175) であるし、エリックとキャスの場面における “damp” (291) や、エリックとヴィヴァルドの場面の “salt from his forehead dripped onto Vivaldo’s chest” (386) など、発汗の描写は頻繁に登場する。

⁹ 「震え」の例としては “tremor” (21, 178) や “tremble” (176, 287, 384)、「うめき」の例としては “moan” (21, 178, 288)、“short cries” (22)、“whispered in Eric’s ear a muffled, urgent plea” (385) や “murmur” (386) などが挙げられる。

引用文献

- Baldwin, James. *Another Country*. New York: Vintage, 1993.
- Brim, Matt. *James Baldwin and the Queer Imagination*. Ann Arbor: U of Michigan P, 2014.
- Dunning, Stefanie. “Parallel Perversions: Interracial and Same Sexuality in James Baldwin’s *Another Country*.” *MELUS* 26.4 (2001): 95-112.
- Fanon, Frantz. *Black Skin, White Masks*. Trans. Charles Lam Markmann. London: Pluto, 2008.
- Fiedler, Leslie. *Love and Death in the American Novel*. Illinois: Dalkey Archive, 2003.
- Freeburg, Christopher. “Baldwin and the Occasion of Love.” *The Cambridge Companion to James Baldwin*. Ed. Michele Elam. New York: Cambridge UP, 2015. 180-93.
- Fryer, Sara Beebe. “Retreat from Experience: Despair and Suicide in James Baldwin’s Novels.” *JMMLA* 19.1 (1986): 21-28.
- Gordon, Brandon. “Physical Sympathy: Hip and Sentimentalism in James Baldwin’s *Another Country*.” *MFS* 57.1 (2011): 75-95.
- Gross, Barry. “The ‘Uninhabitable Darkness’ of Baldwin’s *Another Country*: Image and Theme.” *Negro American Literature Forum* 6.4 (1972): 113-21.
- Martínez, Ernesto Javier. “Dying to Know: Identity and Self-Knowledge in Baldwin’s *Another Country*.” *PMLA* 124.3 (2009): 782-97.
- Miller, D. Quentin. *A Criminal Power: James Baldwin and the Law*. Columbus: Ohio State UP, 2012.
- Nelson, Emmanuel S. “James Baldwin’s Vision of Otherness and Community.” *MELUS* 10.2 (1983): 27-31.
- Ohi, Kevin. “‘I’m not the Boy You Want’: Sexuality, ‘Race,’ and Thwarted Revelation in Baldwin’s *Another Country*.” *African American Review* 33.2 (1999): 261-81.
- Reddinger, Amy. “‘Just Enough for the City’: Limitations of Space in Baldwin’s *Another Country*.” *African American Review* 43.1 (2009): 117-30.
- Rosenblatt, Roger. “Out of Control: *Go Tell It on the Mountain* and *Another Country*.”

Modern Critical Views: James Baldwin. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House, 1986. 77-96.

Thorsson, Courtney. "James Baldwin and Black Women's Fiction." *African American Review* 46.4 (2013): 615-31.

佐々木中『野戦と永遠 上』河出文庫、2011年。

ジジェク、スラヴォイ『ラカンはこう読め!』鈴木晶訳、紀伊国屋書店、2006年。

フロイト、ジークムント『自我論集』中山元訳、ちくま学芸文庫、1996年。

ラカン、ジャック『精神分析の倫理 上』小出浩之ほか訳、岩波書店、2002年。

——『エクリ Ⅲ』佐々木孝次ほか訳、弘文堂、1981年。